

旭川家具の誕生から デザイン都市旭川へ

旭川市は今年で開村130年。様々な苦境を乗り越えてきた先人たちの努力を4回にわたって紹介します。2回目は、旭川家具の誕生からデザイン都市に認定されるまでの軌跡を振り返ります。

新たな地場産業の誕生

旭川には開村当初から木挽場があり、近隣から伐採してきた木の製材を行っていました。明治30年代、第七師団が札幌から旭川へ移駐することが決まると、師団建設のために多くの建築・建具職人が移住してきました。さらに、旭川駅の開業と鉄道の開通などで、まちには建設労働者があふれ、旭川村の人口は急激に増えていきました。

当時の地域経済は、稲作を中心とする農業と交通の要衝を背景にした商業によって支えられていました。しかし、大正2年、冷害による史上最悪の米の大凶作が起これ、地域経済は大打撃を受けます。



木挽場で、伐採した木を挽いて木材にしていた

その翌年に区制制度が施行され、初代旭川区長に就任した市来源一郎氏は、農業と商業に依存していた当時の経済体質を危惧し、天候に影響を受けない木工業の振興に力を入れた取り組みを始めます。振興策の内容として、木工技術を学ぶ木工伝習所の開設や、技術改善と市場調査を目的とした産業視察員の派遣、木工品展覧会の開催などが行われました。市来区長による積極的な振興策で地域経済は安定し、行政と木工業との協働により旭川は家具産都市として徐々に進展していったのです。



木工伝習所

全国に飛躍する旭川家具

昭和10年代半ば、第2次世界大戦が始まり、政府による戦時体制の強化が図られると旭川の家具産業は厳しい状況に置かれますが、終戦後はそれまでの規制が緩和され、徐々に活気を取り戻していきましました。本州と比べて戦争の被害が比較的少なかった北海道では、主に進駐軍用の宿舎で使う家具や建具の製造を行っていました。昭和30年、新たな販路開拓のため、本州から小売業者を招き「第1回旭川木工祭」を開催します。各地の小売業者を産地に集めて家具販売を行う新たな方式は注目を



旭川木工祭

浴び、木工祭は成功を収めました。その後、旭川木工振興協力会から職人の技術力向上とデザインの追求にもっと力を入れていきたいという要望があり、木工芸指導所現在の工芸センター」を開設したのです。旭川家具の知名度をさらに全国に広げるため、東京で開催された全国優良家具展（全優展）に出展します。昭和40年には上川木工が、最高賞である内閣総理大臣賞を受賞し、その後も相次いで入賞を果たします。旭川家具というブランドが全国に認知され、旭川の家具産業は勢いに乗っていきましました。

旭川家具から デザイン都市への歩み

明治23年 1890年	木挽場が開設
明治32年 1899年	師団建設に伴い、多くの建築・木工職人が旭川に移住
大正4年 1915年	木工伝習所を開設
昭和24年 1949年	旭川市が、商工省から重要木工集団地区の指定を受ける
昭和29年 1954年	旭川木工振興協力会を結成し、産地としての確立に力を入れる
昭和30年 1955年	木工芸指導所を開設
昭和40年 1965年	全優展で、上川木工が内閣総理大臣賞を受賞
平成2年 1990年	国際家具デザインフェア旭川を開催
平成9年 1997年	木工芸指導所を、工芸センターに改称
平成29年 2017年	「フォーインテリア宣言」に調印
令和元年 2019年	ユネスコ創造都市ネットワークのデザイン分野に加盟認定を受ける

工芸センター元所長
(平成26年まで在籍)

ほりかわ くにお
堀川邦男さん



木工芸指導所では、先進都市への視察や、国から補助を受けて新技術・製品開発の研究設備を導入するなど、木工業の進展に向けた取組みを行ってきました。こうして、産学官が一体となり、道外にも劣らない家具産地を形成するために実績を積み上げていったのです。



①昭和30年代に製造された家具

②全国優良家具展で内閣総理大臣賞を受賞した、上川木工の家具





デザイナーを目指す子供が増えてくれたらうれしいです

20パーセントグラフィックデザイナー 細谷 壘さん

デザイン都市へ
 こうして、先人たちが長年続けてきた家具やデザインに関する取り組みが実を結び、旭川市は昨年10月に、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）が実施する「ユネスコ創造都市ネットワーク」にデザイン分野で加盟認定を受けました。デザイン都市旭川のロゴマークを制作した、市内のデザイン会社・20パーセントのグラフィックデザイナー 細谷 壘さんに話を聞きました。

「私の主な仕事は、商品パッケージやポスター、広告など、様々な物をデザインすることですが、デザインをする上で一番大事にして



ロゴマークの制作

ているのはクライアントとのコミュニケーションです。この商品を誰にどんな風に使ってほしいのかを話し合い、時には商品開発から携わることもあります。デザイン都市旭川のロゴマークは、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟が認定されたことを受け開催された、ロゴマークのコンペティションに応募して選ばれたものです。先に加盟認定を受けている9都市のほとんどは市章を使用していたのですが、デザインの中心にあるのは、ものづくりをする『人』だと思ひ、人が前に進む姿をモチーフにしたマークを作りました。



デザイン都市旭川のロゴマーク

旭川デザインセンターで開催中 (来年3/28日まで)

フック アンド イート
COOK & EAT
 自宅で楽しむ食事時間

旭川デザインセンター（永山2の10）のショールームでは、自宅での料理（COOK）や食事（EAT）の時間にスポットを当てた企画展を開催しています。オリジナルキッチンやダイニング家具で「自宅での食事時間」が演出されており、食器などを使用したテーブルコーディネートで、より具体的な食事時間を体感できます。

インテリアや家具の他にも、木工クラフト製品の展示・販売も行っているため、ぜひお越しください。

【詳細】旭川デザインセンター ☎48・4135

旭川から世界へ
 米の大凶作がきっかけで始まった旭川家具の歴史。そこには、職人たちが常に持ち続けた家具作りに対する向上心と旭川家具を全国へ広めたいという熱い思いがありました。先人たちが培ってきた高い技術力とデザインを強みに、旭川家具はデザイン都市から届ける家具として、多くの国と地域に広がっていくでしょう。

【詳細】政策調整課 ☎25・5358

時代の先を見越した家具作りが今につながっています



旭川家具工業協同組合 専務理事 杉本啓維さん

「需要の変化」に迫る危機
 平成という新しい時代に入り、人々の暮らしは少しずつ変わっていきます。旭川家具工業協同組合の杉本啓維さんは、この時代が旭川家具の転換期に当たると話します。

「その頃、生活様式の変化や婚



国際家具デザインフェア旭川の様子

ザイン力を磨き、それを旭川家具の強みにしていっただけです。

開村100年を迎えた平成2年には、国際家具デザインフェア旭川（IFDA）を開催しました。これは3年に1度開催しており、中でも家具のデザイン性を競う家具デザインコンペティションは、今や海外でも注目されるイベントにまで成長しました。このコンペの試作品製作には、旭川の家具メーカーが全面的に協力しています。参加したデザイナーの案を基に、短期間で製作する厳しい作業ですが、世界各国の豊かな感性や最先端のデザインを吸収し、デザイナーの思いを忠実に再現するという技術力を鍛える経験にもなっています。



☉IFIインテリア宣言調印式の様子

旭川家具工業協同組合では、洗練されたデザインと巧みな技術に加えて、家具に北海道産材を使用する取り組みも行っています。北海道の森林資源が成長し続ける一方で、十分に活用されていないのが現状です。積極的に道産材を使い、家具だけではなく、北海道の森とも向き合っています」

暮らしとデザイン
 IFDAの継続的な開催を通じ、デザイナーとの国際交流や新しい家具の発掘を行う他、市民にデザインを身近に感じてもらうようと、平成27年から旭川デザインウィークを毎年開催しており、こうした



旭川駅構内の旭川家具ラウンジ

取組みが評価され、平成29年6月には、デザインに関する先進的な取り組みを行う都市として、インテリアデザイナー団体の国際組織である国際インテリアアーキテクト／デザイナー団体連合（IFI）とIFIインテリア宣言を行いました。

「デザインという新たな視点から旭川の魅力や観光資源を再発見し、地域産業の活性化を進めています。」